

ポートランド日本人学校だより

2015. 10. 10

第15-24号

わかば

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm>

毎週火曜日更新

休み時間に避難訓練！

5月2日の不審者対応ロックダウン避難訓練に続いて、10月3日に「強い地震が発生し、その後火災が発生した。」という想定のもと、全校避難訓練を実施しました。今回は、子ども達には知らせず、休み時間に実施しました。避難時の決まり『お・は・し・も（おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない）』を確認したうえでの訓練でした。内容は、大きな揺れを感じた時は近くの教室などの机の下に身を隠し、揺れが収まるまで身の安全を確保すること。その後火災が発生したという知らせを受け、先生の指示に従って決められた避難経路を通して一次避難場所、続いて二次避難場所のグラウンドへ避難するというものでした。

避難訓練に関する指導内容

○普段の指導

- ・学校の避難訓練マニュアルを理解させる。
- ・地震の場合は、特に上からの落下物に気をつける。机の下などに隠れ、頭を保護する。
- ・火災の場合は、すぐに外に出て、煙の来ない、発生場所から遠い所に避難する。
- ・訓練時の決まり「お・は・し・も」の意味を理解させる。

○訓練中の指導

- ・放送や先生の指示をよく聞く。 ・真剣な態度で訓練に参加する。
- ・マニュアルに添った避難を意識させる。

○訓練後の指導

- ・各クラスで避難の仕方はよくできたか、問題点はなかったかを話し合う。

訓練を通しての反省

- ・ほとんどの児童生徒は真剣に訓練に取り組んでいた。
- ・火災発生時の放送から7分で、一次避難場所から二次避難場所へのスムーズな移動ができた。
- ・「火災」、「発生」などの、言葉の意味が良くわからない小さな子たちがいた。（やさしい日本語の必要性）

訓練後の全体指導では、学校にいるときに、地震や火災が発生した際の自分の安全確保について指導しました。訓練だからと手を抜いていると、本番になっても望ましい行動はとれないものです。不審者の侵入や地震、火事など重大な事件や災害はいつ発生するかわかりません。冷静に・速やかに全員が避難できるように、行動の仕方や避難経路について日頃から指導・確認しておくことが大切です。「訓練は有事の如く、有事の時は訓練の如く。」備えは常に必要です。



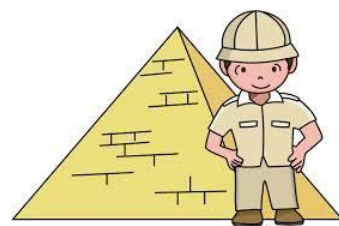
後期授業参観開催のお知らせ

5月の参観懇談会に続き、後期授業参観を10月に実施致します。幼稚部の方は、小学部1年に入学した際の様子を知る良い機会ですので時間がありましたら、ぜひご参観ください。お子様の授業参観実施日に限り、その日に授業参観を実施している他のクラスの参観も良い事と致しますので、一人でも多くの保護者の方々のご来校をお待ちしております。

10月17日(土)	5校時 13:50~14:45	小学部1年2組・4年・5年・6年、中学部、高等部
10月24日(土)	4校時 13:00~13:50	幼稚部
	5校時 13:55~14:45	小学部1年1組と3組・2年・3年

児童生徒の作品より

せかいのなぞふしぎものがたり 2年2組 嶋田優奈



わたしは、なつ休みに「せかいのなぞふしぎものがたり」という本をよみました。はじめによんだのは、「いまだにわからないピラミッドのなぞ」です。むかしの人が、たくさんの人で、なん年もかけて大きな石をつみあげました。しんだ人は、どこからどうやって入るのか、なぞでふしぎなきもちになりました。

「月の起源を探る」を読んで

中学部3年 市橋拓実

僕はこの話を読んで、月の誕生や形成などの謎についての関心をより深めることができた。特に、月の形成についての仮説がとても興味深かった。僕は今まで、月がどうやって作られたかについて考えたこともなく、聞いたこともなかった。それゆえ、最初にそれについて読んだ時は、とても驚いた。古典的な説は、「分裂説」、「共成長説」、「捕獲説」と一般人の僕には考えもつかないものばかりで、「昔の人はどうやってこの説を考えたのだろう」と不思議に思った。さらに読み進めていくと、今最も有力な説は、「巨大衝突説」だということを知った。これもまた、僕の頭の中では想像もできないことで、驚いた。さらに、月を作る実験をコンピュータシミュレーションの中でやるということも驚きだった。あと、作者の文章で、一月(時間)で一月(個数)ができると書いているのに面白さを感じた。

僕は、この単元を読んで、たくさんの驚きや分からないところがあったが、理解を深めていくうちに、月についてたくさんを知ることができた。将来、さらに研究が続き、月について他にもたくさんの事を知れるのが楽しみだ。

「やさしい日本語」を読んで

中学部2年1組 新井愛佳

最近の日本には色々な国から来た外国人がたくさん住んでいます。1994年までは、外国人への情報提供は英語、もしくは各国の言葉で伝えることが普通だと考えられていました。しかし、1995年の阪神・淡路大震災のときは日本語でしか情報が流れず、しかも情報は時々刻々と変わったので、翻訳する時間も人手も足りなかったそうです。自分には理解できない日本語の情報しかない中、外国人は何をすれば良いのか分からずただ立ち尽くすばかりでした。結局外国人への支援が始まったのは、災害時の安全確保が、特に重要とされる72時間(3日)を過ぎてからになってしまったのです。

震災後、大規模な災害下では、今までのように各国の言語に翻訳するのではなく、外国人にも分かるような簡単な日本語に言い換えて伝える事にしたそうです。そうすれば各国の言語を知らなくても良いのでわざわざ翻訳する手間が省け、効率的です。

その「簡単な日本語」は、「やさしい日本語」と呼ばれ、「やさしい日本語」にするには5つのルールがあります。重要度が高い情報に絞る事、難解な語句は言い換える事、災害時によく使われる重要な語句には解説を添える事、あいまいな表現は避ける事、そして複雑な文や長い文は、文の構造を簡単にする事です。しかし、「やさしい日本語」があっても外国人に伝えなければ意味がありません。伝える方法は2通りあります。テレビやラジオなど音声で伝える媒体と、掲示物をはじめとする文字で伝える媒体で、それぞれ工夫点があります。音声で伝える媒体の工夫点は「通常のニュースの約2倍の時間をかけて言う」ということと、「言葉の切れ目ごとに短い間を取る」ということで、文字で伝える媒体の工夫点は「見出しはできるだけ複数の言語で表す」こと、「一枚の掲示物につき1つの情報しかのせない」こと、漢字を使う国の人もいるので「漢字も用いる」こと、「振り仮名はローマ字ではなくひらがなを使う」こと、「言葉の区切りごとに一字分あける」こと、そして「内容に関連する絵や地図を付けて情報を補ったりする」ことです。

実際に「やさしい日本語」を使ったときの効果の検証を行った時、通常の日本語よりも「やさしい日本語」の方が、有効率が25パーセントも高かったのです。このことから、「やさしい日本語」は通常の日本語よりも外国人には理解しやすい、ということが分かりました。「やさしい日本語」は、「外国人への情報提供は各国の言語で」という固定観念から抜け出す事を出発点に生まれ、そのおかげで災害時も外国人がちゃんとした情報を理解できるようになりました。阪神・淡路大震災の時は、多くの人々が亡くなってしまいました。けれども、阪神・淡路大震災のおかげで「やさしい日本語」が生まれ、東日本大震災の時も大変役に立ったのではないかと思います。これからの日本で、「やさしい日本語」がたくさんの人を助けたいな、と思いました。